発達障害リスク幼児のためのN式アセスメント・支援統合ツールの実用性と課題

―保育巡回相談員と保育者の視点から―

松山光生・濱野よしの*・倉内紀子

Examination of the practicality and areas for improvement of a Comprehensive N-type Assessment and Support Tool for children at risk of developmental disabilities: A look from the perspective of patrolling childcare counselors and childcare workers

Mitsuo Matsuyama, Yosino Hamano, Noriko Kurauchi

Abstract

In the present study, we examined the practicality and areas for improvement of a Comprehensive N-Type Assessment and Support Tool from the perspective of patrolling childcare counselors and childcare workers. The Comprehensive N-Type Assessment and Support Tool comprises assessment tools (N-Type strengths and weaknesses checklist and Kaufman Assessment Battery for Children Second Edition [KABC-II]) and support tools (list of methodology tips, childcare support roadmap) to seamlessly cover all steps ranging from the detection of children who are at risk of developmental disabilities to providing of them support. Childcare workers used the N-Type strengths and weaknesses checklist to assess all 49 children in the senior kindergarten class at one kindergarten and four childcare centers in Town B, Prefecture A, and found five children to be at risk of a developmental disability. For those five children, a childcare support plan was created by a patrolling childcare counselor and childcare workers using the list of methodology tips. The patrolling childcare counselor and four childcare workers who wrote the plan were given a questionnaire about the practicality of the tools and areas for improvement. While all responded that the tools had merits, they suggested revising the format of the childcare support roadmap and suggested the need for training to use the tools.

Key words：children at risk of developmental disabilities, patrolling childcare counselor, childcare workers, childcare support plan, list of methodology tips

キーワード：発達障害リスク幼児、保育巡回相談員、保育者、保育支援計画、手立てヒント集

はじめに

要支援幼児とは、本郷ら（2003）でいう「気になる子」と同義であり、知的な発達には顕著な遅れは認められないにもかかわらず、「落ち着きがない」、「他児とのトラブルが多い」、「自分の感情をうまくコントロールできない」などの特徴を持つ幼児のことである。これらの幼児は、１歳６カ月児健診や３歳児健診では発見が難しいとされている。実際の問題として、要支援幼児は３歳児健診のあと、保育所や幼稚園で集団生活をするようになってから、急激に様々な問題点が指摘されるようになる（小枝、2008）。

松山ら（2017）は、要支援幼児の発見ツールとして、６領域30項目から成るN式得手不得手チェックシートを作成した。その上で、要支援児の抽出基準及び支援領

九州保健福祉大学保健科学部言語聴覚療法学科　〒882-8508　宮崎県延岡市吉野町1714-1
Department of Speech-Language-Hearing Therapy, School of Health Science, Kyushu University of Health and Welfare
1714-1 Yoshino-machi, Nobeoka-city, Miyazaki, 882-8508, Japan
*徳島県南部地域　発達・療育相談員
*Counselor in areas of southern Tokushima prefecture

域の設定とともに、その有効性を明らかにし、保育コンサルテーションの活用の可能性を示した。

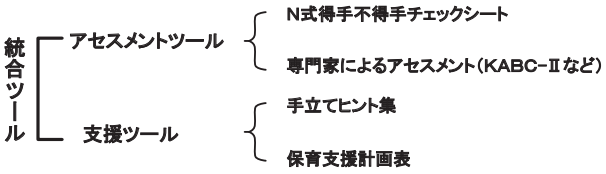

図１　N式アセスメント・支援統合ツールの構成

要支援幼児の支援にはチェックシートだけでなく、その幼児の行動の要因や背景を明らかにする必要がある。今回、保育巡回相談員と保育士が共通の視点に立てるような支援ツールを作成した。支援ツールは、「保育支援計画表」と「手立てヒント集」から構成される。アセスメントツールと合わせて、N式アセスメント・支援統合ツールとした。その構成は、図１に示すとおりである。また、図２のような流れで、各ツールが活用される。

「保育支援計画表」は、いくつかの専門領域にまたがる巡回相談員と保育士間で情報共有できるように、学際的な共通のフォーマットにしたものである。具体的には、図３の通り、フェイスシートとともに、①本児が困っていること、②N式得手不得手チェックシートの結果、③見立て（その子なりの理由―行動の要因）、④園でできる手立て（具体的な支援内容）で構成される。「手立てヒント集」は、図４に示すように、「保育支援計画表」を作成する際、N式得手不得手チェックシートの１項目ないし２項目ごとに背景要因を複数列挙し、その中から適切な支援方法を選択できるようにしたものである（倉内、2017）。「手立てヒント集」を活用することによって、発達障がいのタイプごとに手立てを設ける演繹的アプローチでなく、個々の具体的場面から背景要因を踏まえて、手立てを導く出す帰納的アプローチが可能になると考えられる。さらに、図のように、保育者が分かりやすいように、イラストが多用してある。

筆者らは、N式アセスメント・支援統合ツールを活用した事例研究をこれまで行ってきた。濱野ら（2017）は、N式得手不得手チェックシートの結果に基づき、保育者と協議し、「手立てヒント集」を用いて「保育支援計画」を作成し支援を実施した逸脱行動の多い４歳児クラス男児の事例を報告した。支援の結果、気持ちを切り替えて次の活動に参加できるようになり、卒園直前時期には逸脱行動はなくなった。松山ら（2018）は、N式アセスメント・支援統合ツールを活用して、他児の近くで大声を出してしまう発達障害リスク児が保育園で適切な支援を実施すれば望ましい行動を習得できたと報告した。その理由として、リスク児の支援ニーズを把握し現時点で習得すべき行動を具体的に明らかにできたことと、保育巡回相談員と保育士間で共通の視点で保育支援計画表が作成できたことを挙げている。さらに、松山ら（2019）は、N式得手不得手チェックシートの４領域で支援の必要性を示した発達障害のある５歳の幼児に対して、「手立て

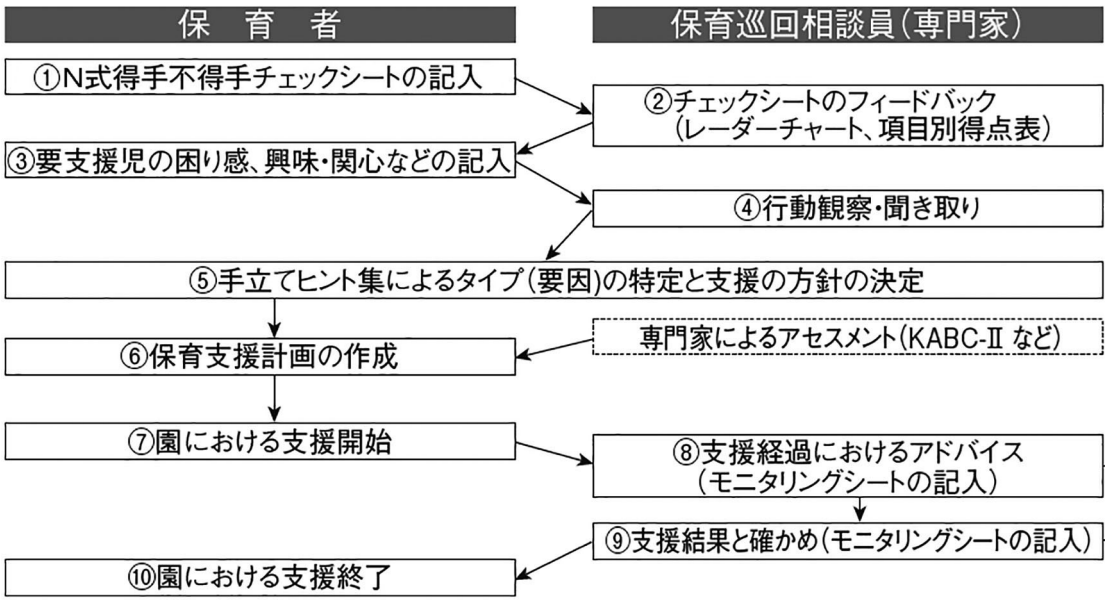

図２　N式アセスメント・支援統合ツールの活用方法

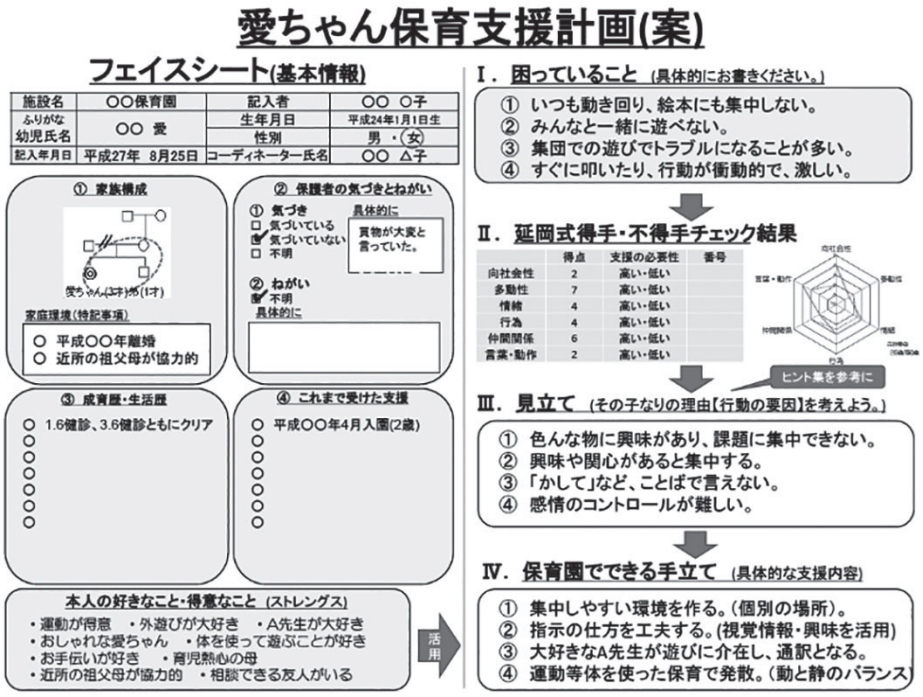

図３　保育支援計画表の書式と記入例

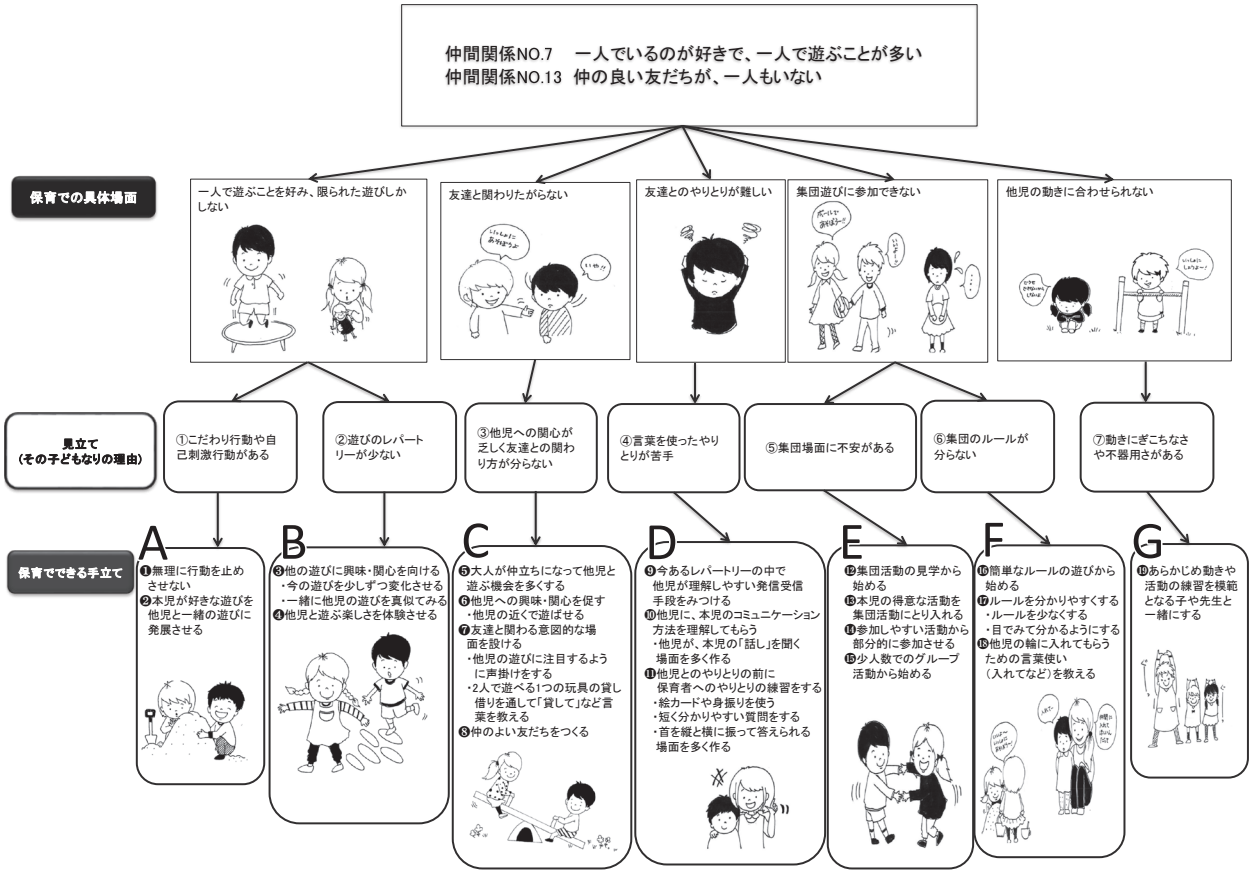

図４　手立てヒント集の例

ヒント集」を活用し背景要因を複数探索し保育支援計画を円滑かつ系統的に作成できたことを報告した。さらに、支援の手立てを具現化する上で、KABC-Ⅱで明らかになった認知特性や語彙の習熟状況が有用であったことを指摘した。しかしながら、これらの研究は、個々の対象児に対する実態把握や支援の適切性が検討されており、保育者側の当該からみた統合ツールの実用性については焦点を当てていない。

本研究では保育巡回相談員と保育者の視点から、N式アセスメント・支援統合ツールの有効性と課題について検討した。

方法

1.調査対象とN式アセスメント・支援統合ツールの活用

A県B町の保育巡回相談員１名（経験年数:13年）と、４園（幼稚園１か所及び保育所４か所）の年長クラス担当保育者４名（経験年数：８～14年）である。保育巡回相談員１名はB町では現在、４園を担当している。保育者４名はそれぞれの園で、要支援児の「保育支援計画書」の作成に関わった。４園の年長クラス全園児49名を担当する保育者４名がN式得手不得手チェックシートを実施し、要支援児５名を抽出した。この際、チェックシートは、図５に示すように、タブレット端末用アプリケーション端末を用いて行った（タブレット端末を用いることで、①記入漏れがなくなり、②入力結果をグラフで即時に可視化できる）。この５名のプロフィールは、表に示すとおりである。このうち、１名がＡＳＤ（自閉症スペクトラム障害）の診断を受けており、加配保育者が配されている。この１名を含め、４園５名の要支援児の「保育支援計画書」が「手立てヒント集」を活用して作成された。

表　要支援児のプロフィール

	性別	支援総合得点	向社会性	多動性	情緒	行為	仲間関係	言葉・動作
NO.1	女児	19	6	9	1	2	3	4
NO.2	男児	25	8	8	5	1	4	7
NO.3	男児	26	4	9	7	1	3	6
NO.4	男児	29	7	9	6	2	4	8
NO.5	男児	29	10	8	4	6	6	5

※下線は、支援の必要性が高いことを示す
※NO.4は、ASDの診断を受けている

2.質問紙

保育巡回相談員用質問紙及び保育者用質問紙はともに、選択回答と自由回答形式を採用した。選択回答形式は、「よくあてはまる」～「全くあてはまらない」の４件法で回答を求めた。保育巡回相談員用の構成は５カテゴリー（＜Ⅰ.アセスメント・支援統合ツール説明時の保育者の様子＞、＜Ⅱ.保育者による「手立てヒント集」の活用＞、＜Ⅲ.保育者による「保育支援計画表」の活用＞、＜Ⅳ.「手立てヒント集」の改善点＞、＜Ⅴ.「保育支援計画表」の改善点＞）18項目である。保育者用の構成は５カテゴリー（＜Ⅰ.アセスメント・支援統合ツールの理解＞、＜Ⅱ.保育者による「手立てヒント集」の活用＞、＜Ⅲ.保育者による「保育支援計画表」の作成＞、＜Ⅳ.「手立てヒント集」の改善点＞、＜Ⅴ.「保育支援計画表」の改善点＞）13項目である。

3.調査時期及び調査方法

調査時期は2017年４月であり、前年度を振り返ってもらった。調査方法は留め置き法である。

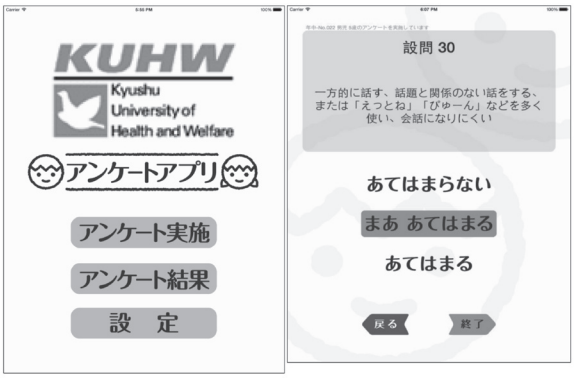

図５　タブレット端末専用アプリケーション

結果

1.保育巡回相談員の回答

1）ツールの実用性について

選択回答形式12項目中７項目が「よくあてはまる」であり、５項目は「どちらかといえばあてはまる」であった。全項目がポジティブであった。自由回答形式６項目でも「N式得手不得手チェックシート」、「手立てヒント集」、「保育支援計画表」に関して、それぞれ、有効性を示すコメントが得られた。例えば、『手立てヒント集』は具体例が多く絵や図でも示されていて、保育者がわかりやすい様子であった。加えて、保育巡回相談員自身が短時間で園児の園での様子を知ることができた」とのコメントがみられた。

2）ツールの課題について

選択回答形式では、５項目が「よくあてはまる」にチェックされなかった。『N式得手不得手チェックシートの結果が支援につながることは保育者が理解できたか』に関連する自由回答として、「チェックシートの結果と『困っていること』が必ずしも一致するわけではないため、『困っていること』が『手立てヒント集』の中から探し出せない事例があった」とのコメントが得られた。

２.保育者の回答

1）ツールの実用性について

選択回答形式12項目中９項目は、２名以上が「よくあてはまる」と回答し、残りの保育者も「どちらかといえばあてはまる」を選択した。自由回答形式でも、「手立てヒント集」に関し、「要支援児の躓きについて、具体場面とその子どもなりの理由がいくつか提示してあり、支援方法を考えることができた」などのコメントが得られた。

2）ツールの課題について

選択回答形式では、図６に示すとおり、「『保育支援計画表』を使って支援計画を立てられますか」の項目は４名全て「どちらかといえばあてはまる」を選択した。「『保育支援計画表』は、使いやすいものでしたか」及び「『保育支援計画表』の活用は、園児の変化に良い影響を与えましたか」は３名が「どちらかといえばあてはまる」を選択した。保育支援計画策定と『保育支援計画表』の活用の改善点について自由回答は得られなかった。しかし、活用後の要支援児の変化に関し、「支援期間が短く、対象児の具体的変化まで至らなかった」とのコメントが得られた。

考察

保育巡回相談員と保育者の選択式回答では全項目でポジティブであり、自由回答においても有効性を支持するコメントが両者から得られた。しかしながら、両者の選択式回答は項目によって「どちらかといえばあてはまる」が散見された。加えて、N式アセスメント・支援統合ツールの課題を表す自由回答が得られた。これらの結果より、保育巡回相談員及び保育者からみて、本統合ツールは概ね実用性が高いものの、改善点が存在することが示唆される。

本統合ツールの実用性の高さに関し、保育者の自由回答の中に、発達障害リスク幼児の躓きの背景要因が複数推測できるというコメントがあった。発達障害の場合、注意欠如多動性障害、自閉症スペクトラム、限局的学習障害など、単独で発症することは少なく、合併することが多い。また、発達障害から派生する不適応など、２次障害を含むことがある。松山ら（2019）の事例研究では、保育者の指示内容が理解しにくく、指示内容が複雑な場合、混乱してしまう発達障害幼児の要因として、語彙が習熟していないことに加え、集中できる時間が短く注意の持続に問題があることを挙げている。このように、要支援児のニーズに関し、複数の背景要因が絡む場合、本統合ツールは特に有効であると考えられる。

保育巡回相談員から、「N式得手不得手チェックシート」や「手立てヒント集」では把握できない困り事があるという指摘があった。本統合ツールは発達障害の多様性を踏まえて帰納的アプローチを重視したが、保育者が抱く想定外の問題は必ず存在すると考えられる。そこで、本統合ツールで全ての問題を解決するのではなく、守備範囲を明確にする必要がある。その意味で、「保育支援計画表」の書式を見直し、図７に示すように、改編した。すなわち、「見立て」と「保育園でできる手立て」といった漠然とした表現でなく、「ヒント集から導かれた手立て」や「園で実際に行う手立て」という具体的で限定的な表現に改めた。

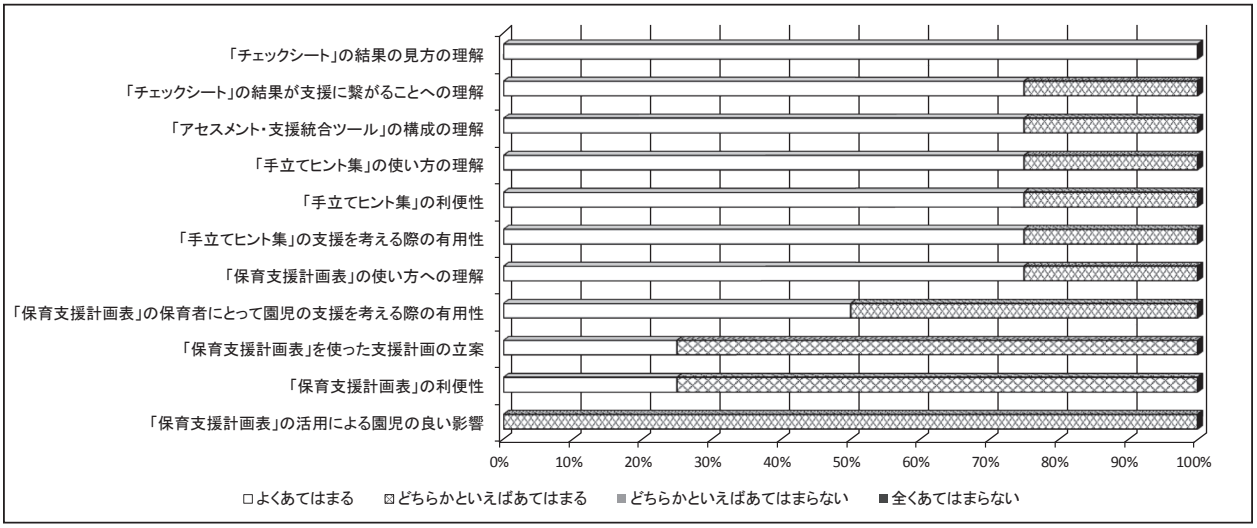

図６　保育者の回答

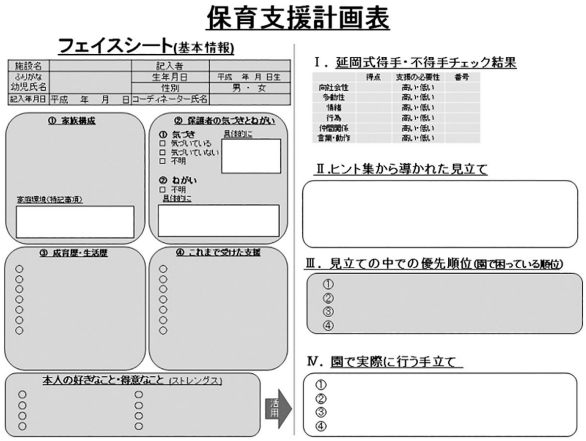

図７　保育支援計画表の改訂版

次に、①「N式得手不得手チェックシート」と「手立てヒント集」､②「手立てヒント集」と「保育支援計画表」の関連性に関し、保育巡回相談員がツールの統合を熟知した上で、保育者の理解をいかに促すかが課題といえよう。そのためには、保育巡回相談員と保育者それぞれを対象とした研修が必要である。延岡市では、N式アセスメント・支援統合ツールに関して、以下のような保育者研修を３回にわたり行った（倉内・他、2016)。各園１名～２名の保育者、毎回約 10 名が参加し、その中で、模擬の要支援児の事例を提示して、「手立てヒント集」を用いて、グループ討議より「保育支援計画表」を作成した。グループ討議には、支援ツールを熟知したファシリテーターを配置した。この研修後、受講者に対して、N式アセスメント・支援統合ツールについて、質問項目を用いて尋ねたところ、理解度がかなりの程度進んだ。今後、他の自治体でN式アセスメント・支援統合ツールを活用する場合、保育巡回相談員と保育者それぞれの研修と併せて、パッケージにすべきであろう。

倫理的配慮

調査の実施にあたり、保育巡回相談員及び保育者に趣旨を説明し、本発表についても了解を得た。また、本研究は九州保健福祉大学の倫理委員会の承認を得た。

謝辞

本論文の執筆にあたり、ご指導頂きました筑波大学名誉教授の藤田和弘先生にお礼申し上げます。

文献

濱野よしの・松山光生・倉内紀子（2017）逸脱行動が多い保育園児の認知特性をふまえた支援．日本K-ABC アセスメント学会第 20 回大会（東京大会）発表抄録集 .

本郷一夫･澤江幸則･鈴木智子･小泉嘉子･飯島典子(2003) 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育士の対応に関する調査．発達障害研究 ,25(1), 50 -61.

小枝達也（2008）発達障害と適正発見．小枝達也（編）５歳児健診―発達障害の診療・指導エッセンス東京 , 診断と治療社, １－４.

倉内紀子（2017）手立てヒント集ブック．延岡市（発達支援システム実践事業：九州保健福祉大学委託）

倉内紀子・他（2016）延岡市発達支援モデル事業報告書（最終報告書）．延岡市発達支援モデル事業検討委員会

松山光生・藤田和弘・倉内紀子（2018）発達障害リスク幼児に対する「声のものさし」を用いた設定保育の有効性：保育コンサルテーションの視点から . 九州保健福祉大学研究紀要,19, １－８.

松山光生・藤田和弘・倉内紀子・戸髙翼（2017）発達障害リスク幼児のためのアセスメントツールに関する研究－延岡式得手不得手チェックシートの開発と活用．リハビリテーション連携科学, 18(1), 9 -19.

松山光生・戸髙翼・首藤郁子・倉内紀子（2019）N式アセスメント・支援統合ツールを用いた要支援幼児の保育支援計画作成:ＫＡＢＣ-Ⅱの結果に基づいて．K-ABC アセスメント研究 21, 52-71.